

みんなの健康ラジオ

『アトピー性皮膚炎の薬物療法』

(2021年11月18日放送)

横浜市皮膚科医会

金沢皮膚科

川口 博史

外用薬

軟膏、クリーム、ローションなどの剤型がある。

- ステロイド外用薬

基本となる薬。いろいろな強さがあり、症状、部位によって使い分ける。漫然と使用すると血管拡張、委縮が起こることがあるが、皮膚科専門医が定期的な診察をしていれば、副作用は防げる、あるいは早期発見できるもの。

- タクロリムス

ステロイドとは異なるカルシニューリン阻害薬。外用初期に灼熱感、痒みなど刺激感がある。

- デルゴシチニブ

ヤヌスキナーゼ（JAK）阻害剤で、上記2種類の薬剤と異なる作用点を有し、2020年6月から成人用が、2021年から小児用も発売された。タクロリムスのような刺激感がない。

- 保湿外用薬

尿素、ヘパリン類似物質、ワセリンなどがドライスキンの改善のため使用される。

内服薬

- **抗ヒスタミン薬**

第1世代、第2世代とあり第1世代は抗コリン作用や鎮静作用が強かったが、第2世代はその欠点が改善されている。1日1回内服でいいものや、鎮静作用の少ないものがある。

- **ステロイド**

急性増悪時に一時的に使用する。全身的な副作用の点から長期連用は一般的には推奨されていない。

- **シクロスポリン**

重症、難治例に2~3か月内服することが認められている。免疫抑制剤なので感染症や、高血圧、腎障害などに注意する必要がある。

- **漢方薬**

有効な場合があるが、重い副作用の報告もある。東洋医学独自の「証」によって処方薬を決めていくので、漢方薬に習熟した医師のもとで行われるのがよい。

- **JAK阻害薬**

バリシチニブが、2020年からアトピー性皮膚炎に適応が追加された。ヤヌスキナーゼを阻害し痒みや炎症を抑える。活動性の結核や肝炎などの感染症がないことを事前に調べて、定期的に検査する必要がある。同効薬であるウパダシチニブもアトピー性皮膚炎に適応が追加された。

注射薬

- デュピルマブ

アトピー型のアレルギー反応に重要な役割を果たしているIL-4/IL-13の働きを抑える。今までの治療経過や症状の重さ、主治医の臨床経験など、一定の条件が必要。2週間に1回皮下注射し、症状が落ち着いてきたら、毎回受診しないで、インシュリンのように在宅で自己注射も可能。

これからの治療薬

- PDE4阻害薬であるジファミラストという外用薬が認可され近々市販される予定。

他にもIL-31を抑える薬剤など、新しい作用点の生物学的製剤が現在も多数開発中で、今後は治療の選択肢がさらに広がることが期待されている。